

U35 私たちがまちを育む。実践アイデアコンペ

鳥羽駅。

育む移動の拠点、

自分たちごとを



コンペHP



Instagram

主催 一般社団法人まちあそびラボ

共催 東京大学大学院岡部明子研究室 一般社団法人 ASIBA / 後援 鳥羽市

1 今回のコンペについて

目的

- ① 鳥羽駅とその周辺エリアの再開発に注目を集める。
- ② 幅広いアイデアによって検討部会での議論の幅を広げる。
- ③ 駅周辺に〇〇が欲しい！から〇〇をやってみよう！へ
⇒ 自分たちごとを育む移動の拠点へ

結果

- ① 200名以上の方が鳥羽駅に対して提案していただき、合計78作品集まる。
各イベント60名の参加者が集まり、提案者とともに鳥羽駅を構想した。
- ② 検討部会での発表の場を用意していただき、議論を行う。
 - ・必ずしも商業的なものではなくてもいいかもしれない。
 - ・すでにあるものに大きな価値があるのかもしれない。
 - ・プラスしていく再開発ではなく、引き算していくことも考えられるかもしれない。
- ③ コンペで出てきた提案をもとに、これから様々な取り組みを実証的に行っていく。
みんなで動きだす鳥羽駅をつくりあげる。

1 今回のコンペについて

調査研究により明確になった課題

- ①自分ごと化する機会の欠如：多くの市民にとって駅は公共交通の拠点という認識に留まっており、自分たちが関与し、活用できるまちの広場としての認識が薄い。
- ②ハード主導の再開発に対する固定概念：再開発＝既存のものを壊して新しく建てるという考え方が根強く、多額のコストや維持管理の負担が前提となっている。既存の資源を整理し、空間を引き算することで生まれる価値や、余白の活用に関する視点が不足している。
- ③ソフト面での継続的な担い手不足：ハードの整備だけでなく、駅前で日常的な賑わいや活動を維持するための、若者や外部人材が参画しやすい仕組み（プラットフォーム）が整っていない。

調査研究により明確になった課題

- ①引き算による空間の再定義と活用：何かを建てることありきの計画ではなく、過剰な施設や機能を整理・解体し、あえて何もない空間（余白）を作ることで、市民が活動を書き込める柔軟な場を創出すべきである。既存ストックの整理を通じて、鳥羽らしい風景や活動が見える空間へと再編集することが求められる。
- ②暫定利用による空間活用の検証：大規模な再開発を待つだけでなく、コンペで得られたアイデア（ストリート家具の設置や小規模なイベント等）を試験的に実行し、市民の反応を見ながら段階的に空間を改善していく手法を取り入れるべきである。実践を通じて課題をあぶり出し、柔軟に軌道修正するプロセスそのものを計画に組み込む必要がある。
- ③多主体が参画する挑戦的な運営組織の構築：行政・鉄道事業者・地元商店街に加え、本コンペで関わりを持った若者や専門家が継続的に関与できる、官民連携のエリアマネジメント組織の検討が必要である。既存の枠組みに捉われず、多様なバックグラウンドを持つメンバーで構成することで、他駅の模倣ではない鳥羽駅ならではのあり方を常に追求し、既成概念を打破する挑戦的な取り組みを継続していくべきである。

2 これまでの鳥羽駅コンペの流れ

1 2024.4 鳥羽駅とその周辺エリアの再開発を知る

2024年度から鳥羽駅の再開発を進めることが鳥羽市から発表され、それに伴い鳥羽市では鳥羽駅周辺エリア再生ビジョン策定委員会を立ち上げた。鳥羽市の地域おこし協力隊としても活動したコンペ企画リーダーの正林は、ポテンシャルはあるけどうまく活かしていない課題について鳥羽市の方々とお話しすることは多くあったが、何から始めるべきなのかがわからなく、実行に移せない市民がいることがわかった。



もっと鳥羽市民が動き出すきっかけになる企画をつくれなかな？

策定委員会でももっと幅広い視野を持って鳥羽駅を構想していきたいと議論されていたところであった。



今までにない駅の再開発をつくりだしていきたい！

そのため、全国の若者をまきこんでアイデアを募ることで、新しい視点を取り入れながら、今までにない地方都市の駅のあり方を模索するためにコンペの企画を立ち上げることに至った。

2 2024.12-1 コンペ企画準備

2月募集開始に向けて、鳥羽市企画財政課と策定委員会の方々との打ち合わせを重ねながらコンペ企画を準備した。応募要項（コンセプト文、審査基準や応募形式等）の作成、審査員集め、ホームページの作成やコンペサイトへの掲示を行った。



コンペ参加者と審査員、地域の方と議論を生み出すテーマってなんだろう？

最終的に審査員と相談を重ねて、『自分たちごとを育む移動の拠点、鳥羽駅』というテーマとなった。観光都市であるため外からの玄関として考えることが多い鳥羽駅だが、市民が自ら動き出せることに期待している。

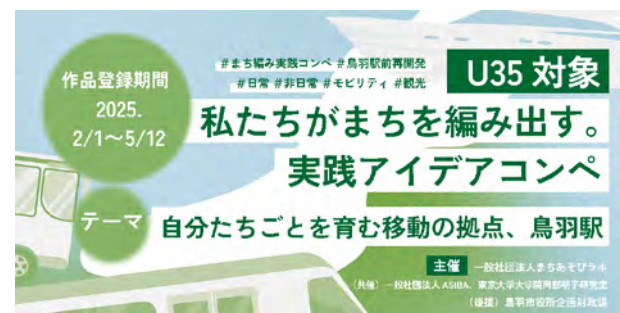


鳥羽駅周辺エリア

コンペの審査員



藤原 徹平	FUJIWALABO 主宰
指出 一正	『ソトコト』編集長
大井 隆弘	三重大学工学研究科建築学専攻准教授
湯谷 紘介	株式会社 KISE 代表取締役 湯谷建築設計
佐藤 和貴子	株式会社 AMANE



コンペ募集開始

3 2025.3-4 現地見学会の開催

近鉄、観光協会、鳥羽一番街、鳥羽市定期船課の方々のご協力のもと、参加者に向けて現地見学会を3回（3月15日1回、4月6日2回）行った。合計80名以上の方が鳥羽を来訪し、鳥羽の課題やポテンシャルについてリサーチをした。



鳥羽との繋がりだけでなく、参加者同士の繋がりも生まれたよ！

4 2025.5 一次審査

一次審査には78作品が提出された。高校生から社会人まで幅広い層から、多種多様なアイデアが集まった。地域に議論を起こすことが目的であったことや、審査が二段階制であったことから、幅広い視点の提案を選びたい、という観点で一次審査通過6作品が選出された。

5 2025.5 鳥羽駅アイデア構想会議

一次審査を通過した6作品をさらにブラッシュアップするために地域の方と現地ワークショップを開催した。合計68名の方が参加し、コンペ提案のプレゼン、ポスターセッション、グループワークを行った。提案者の熱量に驚く地元の方が多く、実際に形が見えるよりも自分ごととして考えられるという反応がありました。



実践に繋がるように地域の方と提案のマッチングを意識して鳥羽市の方に相談しながら班分けをしたよ。



熱量の高い提案に刺激をうける地域の方々



参加者同士の交流会



近鉄鳥羽駅

鳥羽一番街

定期船課



全提案を展示



グループワークの様子

6 2025.7 コンペ最終審査会

案のブラッシュアップを経て、コンペ参加者、審査員の方々、地域の方々が集まり、7月5日に公開最終審査会を開催した。審査員に加え、来場者は「提案を実現するために私ならこんなことができるよ」という可能性などをメッセージにこめた『とばみらいカード』を提案者に渡していただいた。合計100枚を超えるカードが交換されて、確実に地域からの動きが生まれていた。最終的に、最優秀賞が代表者吉野さん、優秀賞が代表者吉田さんの提案に決定した。



最終審査会の様子

7 2025.8 高校生対象 鳥羽駅構想合宿

コンペを通じて生まれた問いやアイデアをもとに、高校生とともに鳥羽駅の未来を考える構想合宿を開催した。地元の高校生はもちろんのこと、市外や県外からの高校生、総勢15名で本気で鳥羽駅を変えることを目指して大学生や研究者とともに構想した。



今まで関わりのなかった高校生同士が刺激し合う合宿になるように企画したよ。



最優秀賞 吉野さんチーム



とばみらいカード

8 2025.8 策定委員会にて発表

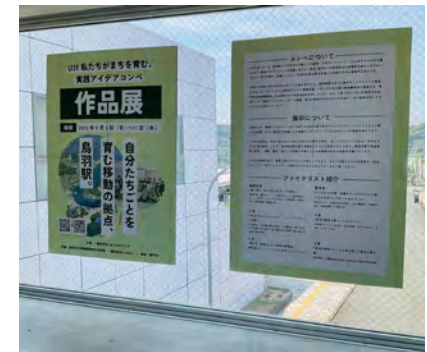
コンペの受賞者は8月18日、鳥羽市の策定委員会で発表を行った。地域住民や行政関係者とともに、鳥羽駅の将来像をかたちづくるための議論の起点となる。委員からは、「今まで考えてきたこととは全く違う視点でハッとさせられた」とコメント。ここから、提案が施策やまちづくりの方針と接続し、より具体的な実装フェーズへと歩みを進めていく。

鳥羽駅の渡り廊下での展示を行い、鳥羽市民の注目を改めて集める。そして、コンペやキャンプで生まれたアイデアの一部は、地域と連携しながら小さな実践へと展開していく。

まきコンペの実践は現在も続いている...



策定委員会での発表



鳥羽駅で作品展を開催

3 ファイナリストの作品

最優秀賞 『海へ還る、水と共に生きる、佐田浜』

吉野和泰（朝のリレー）、小西なずな（一般社団法人アーバンデザインセンター坂井）、

小野純実（鳥取大学）、本田実波（鳥取大学）

優秀賞 『15,000tの円環 牡蠣のアップサイクル工程による自分ごとで考えるまちづくり』

吉田キラリ（千葉大学大学院）、五十嵐奏大（千葉大学）、高橋侑暉（千葉大学）

入賞 『Amplified Concourse 〈トバ・ユックリズム計画〉』

中村茉生（名古屋大学大学院）、近藤叶望（名古屋大学大学院）、

中村皆知（名古屋大学大学院） 森千遥（名古屋大学大学院）

入賞 『鳥羽の風景を繋ぐーしまブリッジ』

山岡恭大（スタジオ山）、穴水宏明（スタジオ山）、今埜歩（スタジオ山）

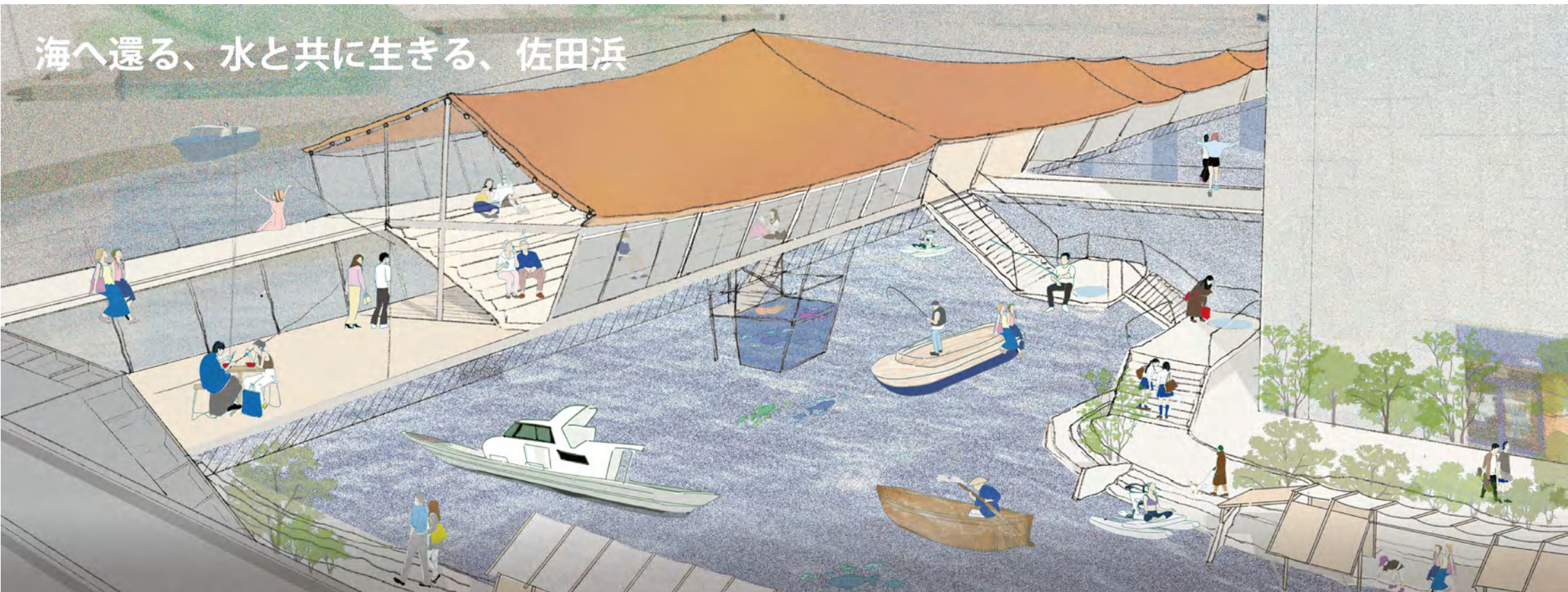
入賞 『風まち 稜線がつなぐ鳥羽の原風景』

松岡 竜生（フリーランス）、井上玉貴（フリーランス）

入賞 『鳥羽の風景をつくる生業を映した島の小屋小屋』

中西智礼（大阪大学大学院）石光基（大阪大学大学院）

海へ還る、水と共に生きる、佐田浜



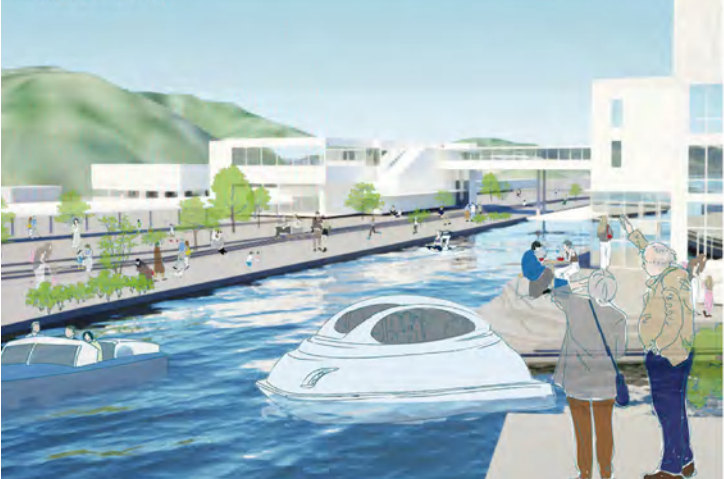
1911年、開業当初の鳥羽駅は佐田浜の豊かな海に開かれ、日常的に水に触れることのできる風景が広がっていた。高度経済成長期に入り、モータリゼーションの進展や観光経済の発展を背景に、佐田浜海岸の埋め立てと海岸沿いの新国道の建設が進められたが、現在は駐車場の存在感が際立つ空間となっている。計画から50年経ち、人口減少や若者の流出が都市経営上の根源的な課題として浮き彫りになり、南海トラフ地震や海面上昇、頻発する豪雨災害への適応策も喫緊の課題となっている。いま、鳥羽駅周辺の再整備を契機として、未来志向で佐田浜エリアの価値・可能性を見直し、伊勢・志摩を含む広域のエリアとの関係のなかで、新しいエコシステムを構築することが求められている。

私たちは、鳥羽駅の眼前にかつて広がっていた豊かな海の風景を手描かりとしつつ、これまで進められてきた鳥羽市・佐田浜エリアのまちづくりの取り組みや、既存のストックを最大限活かし、市民・離島住民、商業・旅館関係者、観光客らが協働で海のある風景を取り戻していくデザインプロセス「海へ還る、水と共に生きる、佐田浜」を提案します。

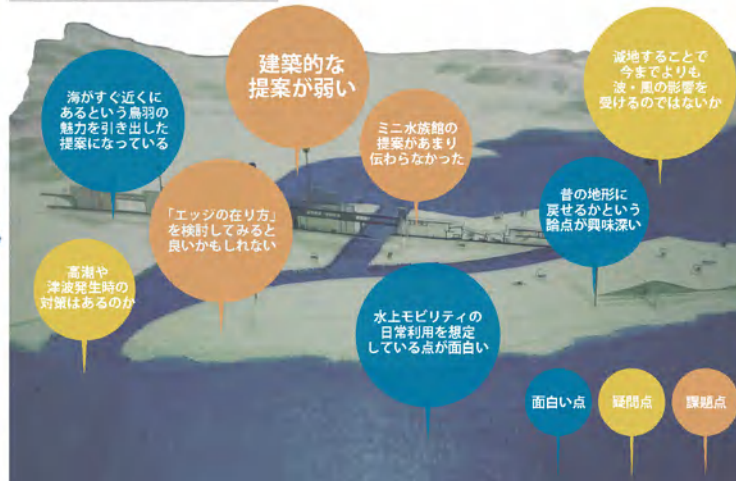
「海へ還る、水と共に生きる、佐田浜」では、今から30年後(2055年)の佐田浜エリアの将来像を想像しながら、バックキャストिंगによって、15年後(2040年)、5年後(2030年)にそれぞれ達成したい目標を設定しています。これらは、将来像の実現に向けて明日から始められる3つの実践アイデアと具体的な10の実践プログラム、およびその評価指標から成ります。具体的には、【①モビリティの変革(道路交通の面的な再編、歩行者・自転車優先の空間創出、水上交通の導入)】【②海の価値・可能性の再発見(観光プランニング、防災機能向上)】【③多様な出会いの場の創出(循環型経済、生活様式の変化)】を重視します。

これらによって、マリンターミナル(広域連携)～鳥羽駅(交通結節点)～城下町エリア(盛り場)をゆるやかにつなげ、潮の満ち引きのように、時間帯や季節による人の滞「流」を促します。佐田浜エリアの歴史的文脈を生かしながら土地や生活を段階的・順応的に海へ還していくプロセスそのものが、他のまちでは実現できない鳥羽の新しい価値になると考えます。

一次審査の成果物



構想会議でいただいたアイデア



最終提案のダイアグラム





鳥羽の最高潮位より下に設置された階段状の護岸は、時期や時間によって汀線を移ろわせ、人と自然の境界を曖昧なものにする。人々は訪れるたびに異なる景色や生き物の様子に触れ、楽しむことができる。

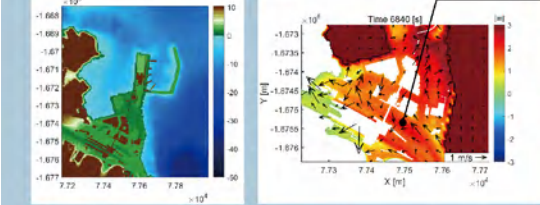
貝殻を再利用したブロックを用いた魚礁は、壁・階段・ベンチ等の人間の空間と海洋生物の共存性を高める。

参考資料
アサヒビル
(カネ隆加工用形材)



減地による沿岸減災の効果検証 (地上した地高：中央部は全高海抜トर्फ地高シナリオ 01)

【現在の地形での浸水シミュレーション】



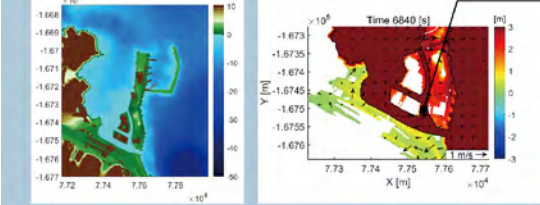
線路の大部分が2m以上浸水し、避難のための交通手段として機能しない。津波が駅の北西・南方向に流れ込む可能性も高い。

【浸水被害の低減効果】

浸水深 [m]	減災前 (浸水) 面積 [m ²]	減災後 (浸水) 面積 [m ²]
0.5-1.0	~3.5	~2.5
1.1-1.5	~3.0	~2.0
1.6-2.0	~2.5	~1.5
2.1-2.5	~2.0	~1.0
2.6-3.0	~1.5	~0.5
3.1-3.5	~1.0	~0.2
3.6-4.0	~0.5	~0.1

浸水面積が低減
浸水深1m以上→津波による死亡率を低減する効果
浸水深2m以上→家屋の全壊を防ぐ高い効果

【30年後の提案地形での浸水シミュレーション】



佐田浜東側から波が水路を抜け越堤が抑制されることで、駅周辺の浸水深は1m以下に低減される。津波の浸水拡大エリアが一定程度に抑制される。

【暴露面積の低減効果】

減地により浸水被害が発生しなくなる(非暴露)面積 (38,786m²減少)

海に還すエッジ
穏やかな湾に面する自然に近い空間

- 湾の眺めを楽しむ
- 魚礁ブロックの生態系を観察
- 釣り
- 海水浴

連絡橋
既存のインフラを活かしながら、海に対する新しい視点場や立体的な動線をもたらし、人と海の関係性を結びなおす回廊空間

- 上から水路を泳ぐ魚を眺める
- 駅から歩きながら心地よい潮風を感じる

交通・ターミナルのエッジ
陸上交通と水上交通をつなぐ空間

- 陸上の公共交通から水上モビリティ(小さな交通)への乗り換えや徒歩での回遊
- 船の往來を眺める

遊び・公共的なエッジ
緑地の微地形と連続する緩やかな水際が織りなす立体的なあそびの空間

- だんだんに座って水上ライブを観覧
- 子供達が水上モビリティと走って競争
- 水上モビリティに乗っている人とエッジで過ごす人が手を触り合って交流
- 連絡橋のある風景を楽しむ

水路の種分かれ地点
3つの異なる特徴を持ったエッジに囲まれる祝祭のステージ、水上でのアクティビティが主役になる空間

- 水上ライブの開催
- 船上レストランでランチ
- 海上結婚式

海と触れるエッジ
貝殻魚礁を活用した憩いの親水空間

- 水上モビリティを眺める
- ハレ空間で行われるイベントを楽しむ
- 海に足をつけながらおしゃべり

商業(飲食・マルシェ)のエッジ
一番街の賑わいを屋外化し対岸に伝播させる社交的空間

- フリーマーケットの開催
- 一番街で買い物後にソフトクリーム



15,000tの円環

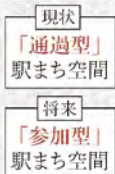
牡蠣のアップサイクル工程による自分ごとで考えるまちづくり計画

本提案では牡蠣を通して鳥羽のまちに新たな結節点を作り、廃棄殻を活用した「参加型」駅まち空間の形成を行うことで、自分たちごととして考える提案を行う。鳥羽は、自然豊かな風景の中に多様な暮らしの拠点が散在し、それらを繋ぐネットワークが存在している。鳥羽駅はその結節点であると言える。しかし現在の駅は単なる移動の拠点となっており、鳥羽という町の魅力が駅まち空間に反映されていない。本提案の核となるのは「牡蠣」である。鳥羽では牡蠣養殖をはじめとした水産業が盛んであり、対象地周辺の谷志島・菅島・坂手島では、牡蠣やサザエなどの養殖が行われている。しかし、現状では鳥羽で牡蠣養殖が盛んであることがあまり知られておらず、牡蠣などの魅力をまちづくりに十分に活用できていない。また鳥羽市の問題として、貝殻の廃棄量は年間1万5000トンとなり、観光客の増加によって廃棄量もさらに増加してしまう。具体的な提案としては、対象地に牡蠣の貝殻のアップサイクル工程を分散し配置する。貝殻のアップサイクルは、「①食べる②干す③洗う④砕く⑤活用する」という5つの工程に分類し、この5つの過程を、鳥羽のマリンターミナルから鳥羽駅に向かう動線の中で体験できる要素として盛り込むことで滞留点を生み出し新たな自然や人との関係を生み出す。さらに、鳥羽を訪れた人自身が五感を通して体験できるようにしており、鳥羽が持つ海や山などの様々な自然を装置を通して増幅させることができる。つまり、訪れた人自身が牡蠣のアップサイクル工程に参加することはまちづくりに参加することでもあり、鳥羽という町や貝殻の廃棄の問題について、自分事として考える機会となる。

1. INTRODUCTION

「通過地点」となってしまう駅まち空間

日本、特に地方都市では駅周辺の土地利用が頻りに議題に上がる。特に駅周辺の活力低下に伴う地域への訪問動機の下での結果、安定的に利益が得られる駐車場への転用が進んでしまい、交通結節点のみの機能となり、まちの魅力・資源をさらに失ってしまうという、さらなる悪循環をもたらしてしまう。一方で多くの地方都市には様々な地域資源が眠っており、それらをまちづくりに活用させていくことで、通過地点ではない、駅まち空間を作れるのではないのか。



無駄になってしまう食料廃棄物問題

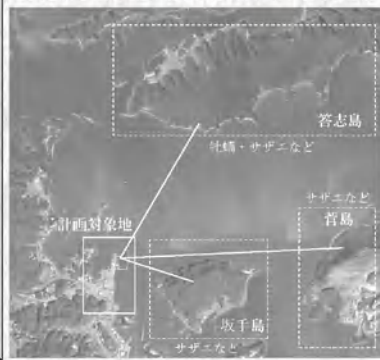
日本では食料廃棄物の問題が頻りに議題に上がる。中でも観光地における食料廃棄物問題は環境負荷の観点から重要な課題となっている。ホテルや飲食店など、観光客を対象と施設では料理の準備や販売、保管など様々な段階でゴミが出てしまっている現状が存在する。一方で人口減少などの様々な問題が進む地方都市では、より人々に来てもらえるように観光地化を推し進めるような動きがある。つまり地方都市では今後食料廃棄物問題が起きる可能性がある。



多くの資源が眠るまち：三重県鳥羽市鳥羽駅前

①鳥羽が有する資源

鳥羽市のなかでも本計画地は交通結節点となっており、様々な地方から多くの観光客が訪れる。港から船に乗り行くことができる島々では、牡蠣養殖をはじめとした水産業が盛んに行われており、今後のまちづくりに活用していくべきだと考える。また、現在の計画地周辺には「サザエストリート」や「鳥羽一番街」、「鳥羽マルシェ」などの観光地や飲食店があり、海との距離が近いまちといえ、提案に活かすべきである。



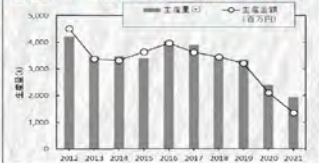
②鳥羽に抱える課題

本計画地周辺の課題として駐車場が多いため、休憩できる場がマリンターミナルまで無く滞留点となる場も無いことから、歩行者などにはあまり優しい場所とは言えない。鉄道によって山と海が分断されてしまっている。また交流拠点となるような公民館や公園のような場も鳥羽駅-マリンターミナル間には無いことから、通過するだけの道となってしまう滞留できず交流などは生まれず、場のポテンシャルを活かせていない。



③鳥羽における食料廃棄物の発生

三重県では年間約2000tの牡蠣が生産されるとともに鳥羽市では年間約1万5000tもの殻が廃棄される。観光客が増えると廃棄が増えると見込まれ、早急な対策や周知が必要である。



マリンターミナル

2. PROPOSAL

貝殻のアップサイクルによる「参加型駅まち空間」の形成

本提案では、従来の「通過地点」の駅まち空間から、駅に立ち寄ることが牡蠣のアップサイクルの循環に参加するという「参加地点」の駅まち空間となるよう駅まち空間の再定義を行う。地域住民や観光客、働く人など様々な人が集まりまちづくりに参加することで自分たちごとを育む。

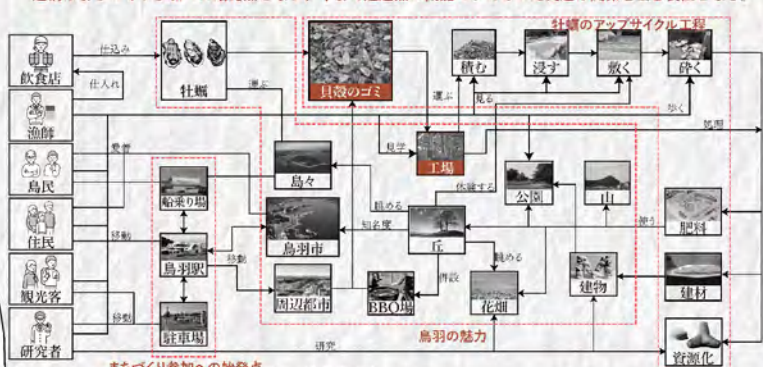
①「参加型」駅まち空間の設計手法

現在、鳥羽市浦村町で行われている牡蠣のアップサイクル工場の工程を分析・5つ抽出し、まちの要所に落とし込む。

	①「食べる」	②「干す」	③「洗う」	④「砕く」	⑤「活用する」
空間的側面	人が集まる	視線を遮る	水が流れる	音が出る	肥料になる・調湿効果
環境的側面			周囲が冷える		
工程					

②牡蠣のアップサイクルによる新たなネットワークの構築

参加型駅まち空間の形成により多くの関係者が新たな関係を創出できる。駅や船乗り場、駐車場といった交通網はまちづくり参加への始発点となり、今まで通過点の機能のみであった交通は関係を生む装置となる。



③牡蠣のアップサイクルによる新たな環境資源

①牡蠣殻の肥料で鳥羽を緑化

砕くことで有機石灰肥料となっており土壌改良も期待できる。鳥羽で消費された牡蠣殻がさらに鳥羽の緑化に貢献する。牡蠣の消費者と鳥羽を結ぶ。

②多孔質性で涼しい空間

牡蠣殻を浸すための池や殻の多孔質性から気化熱で温度を下げる効果がある。夏の暑い時期でも生活がしやすい快適な空間にする。

③資源化のリーダー的存在へ

鳥羽が、牡蠣殻を廃棄プラスチックやコンクリートと組み合わせられる新素材の資源、シェルティクの有効活用へのトップランナーとなる。

3. PLAN, DRAWING

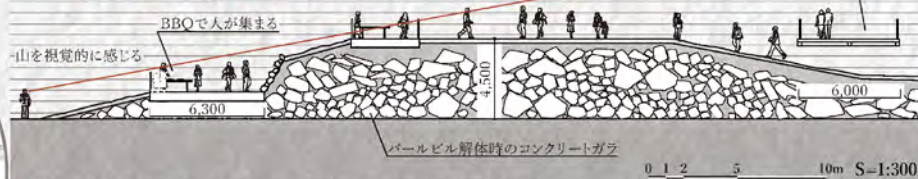
「参加型まち空間」を形成する5つの参加型空間

①「食べる」ことで人が集まる空間

答志島で養殖された牡蠣を食べる。食べる動作や香りは人を呼び込み、賑わいをもたらす。土を盛り、駅から伸びる通路と接続することにより便利になるだけでなく島羽の山々へ視覚的に誘導する効果も持つ。

視覚的に山を感じることで有事の降避難を早急にできる

駅とのつながりを形成



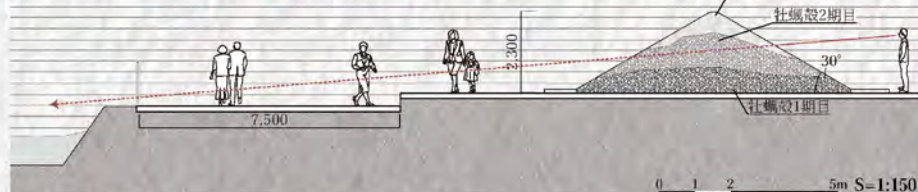
②牡蠣を積み上げることで食べる量を視覚的に感じる空間

鳥羽の持つ美しい海を背景に牡蠣殻を積んでいく。殻が増えれば増えるほど海が見えにくくなっていくことで人々が捨てているゴミの量を視覚化し、考えるきっかけとなる。

牡蠣殻3期目

牡蠣殻2期目

牡蠣殻1期目



③「洗う」行為を視覚的に感じつつ、山と海を結ぶ軸線となる空間

道を歩く傍ら、牡蠣を洗う水場を作ることで豊かな空間を提供する。休憩したり人々が話したりすることで交流が生まれる。さらに山と駅を結ぶ軸線を海まで延長させることで、山などの高台から見た際に山と海の関係性が感じられる。

気化熱により周囲を冷やす

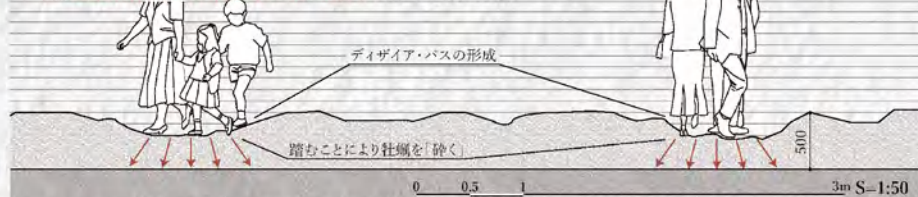


④「移動」することで牡蠣のアップサイクルまちづくりに参加する空間

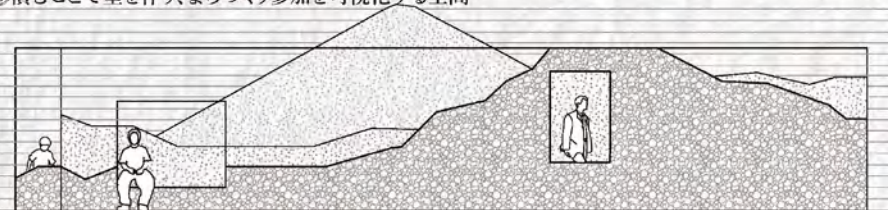
歩いて移動することで牡蠣を「砕く」工程に参加する。牡蠣殻を敷くことにより人の通る道が可視化され、自分の道が形成される。出来た道を分析することで今後のまちづくりに活かすことができるようになる。

デザイナー・パスの形成

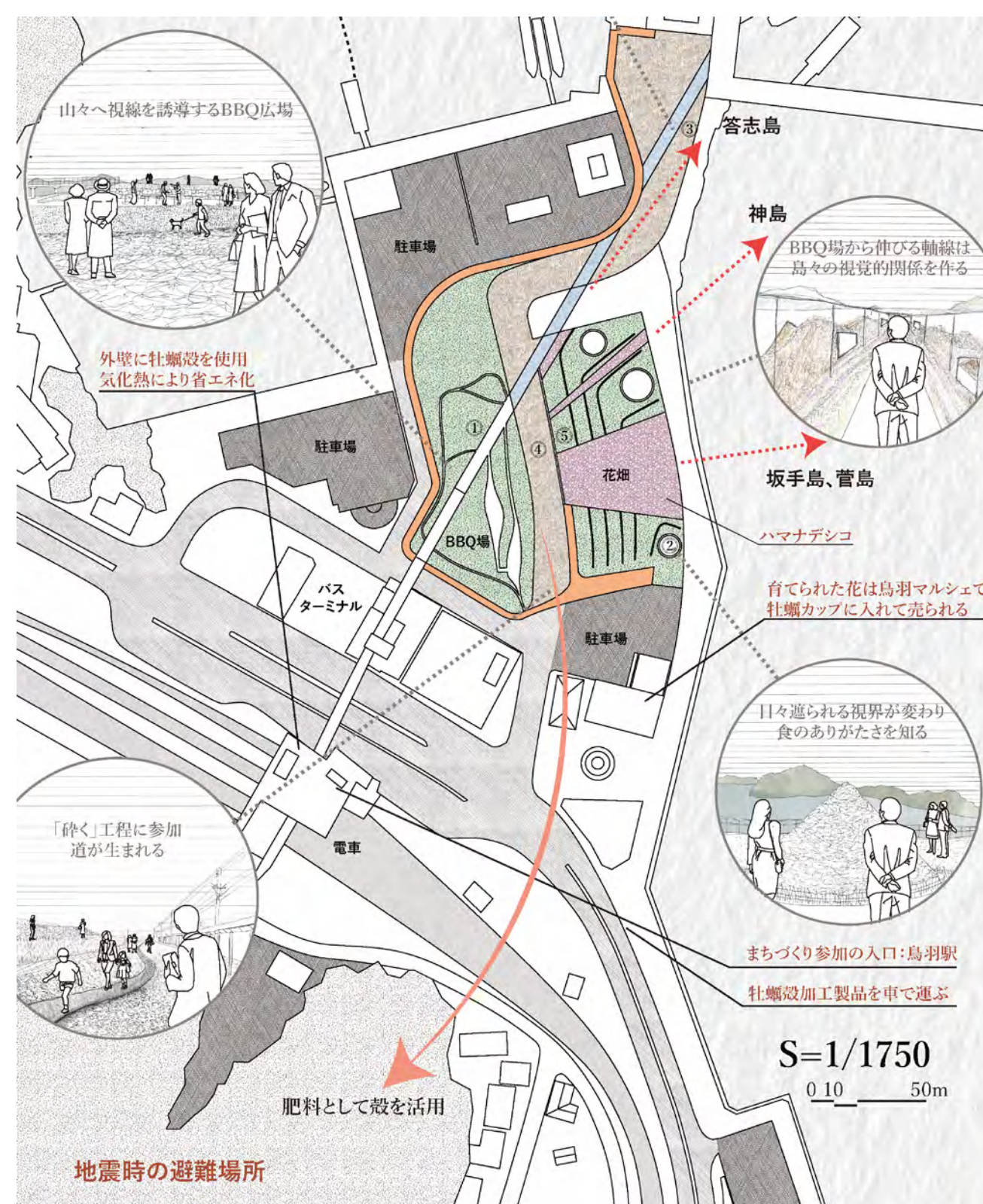
踏み込むことにより牡蠣を「砕く」



⑤積むことで壁を作り、まちづくり参加を可視化する空間



ガラスでできた壁の中に工場で洗った牡蠣を入れていくことにより壁を作る。日々壁の形が変わり、まちづくりへの参加を可視化する



山々へ視線を誘導するBBQ広場

外壁に牡蠣殻を使用
気化熱により省エネ化

神島

BBQ場から伸びる軸線は
島々の視覚的關係を作る

坂手島、菅島

ハマナデシコ

育てられた花は鳥羽マルシェで
牡蠣カップに入れて売られる

日々遮られる視界が変わり
食のありがたさを知る

まちづくり参加の入口:鳥羽駅

牡蠣殻加工製品を車で運ぶ

S=1/1750

0 10 50m

肥料として殻を活用

地震時の避難場所

「砕く」工程に参加
道が生まれる

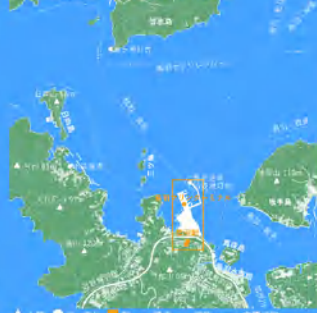
鳥羽の穏やかな場所性を増幅し、滞在と移動がゆったりと交錯する〈トバ・ユックリズム〉を提案する。

まず、鳥羽駅と連続する〈しましま広場〉を駅から埠頭まで整備する。広場には、さまざまなプログラムが層状に盛り込まれる。また、日和山に向けて段状に構成された駅舎は、線路や国道を越えて緑と人をつなぐ。

さらに、港周縁を小型モビリティと徒歩でめぐる〈ゆらゆらロード〉を設け、ゆるやかなカーブが連続する屋根の下で、歩行者と低速モビリティのゆったりとした流動を促す。

港に広がる〈しましま広場〉でのユックリな滞在と、〈ゆらゆらロード〉でのユックリな移動によって、鳥羽ならではの穏やかで開かれた移動の拠点を目指す。

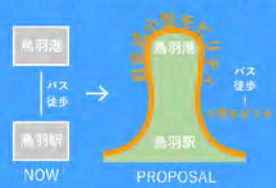
通過点とされた埋立地



▲広場 ●駅前 ●駅一通過 ●駅前 ●主要道路
計画時は、おおらかな野島風景の中で、生活と観光が重なり合う場所であるが、現状は駅と港が独立して存在しており、甲なる通過点となっている。

〈トバ・ユックリズム〉

鳥羽らしいおおらかな移動拠点



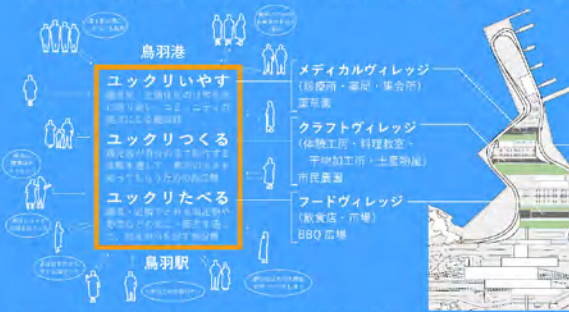
〈ユックリズム〉実現のために

① 駅を港まで引き伸ばすように、埋立地を〈しましま広場〉として整備し、日常生活・非日常観光のための、緑と水のそばでゆったりと過ごすことができる場所をつくる。

② ゆるやかなカーブ〈ゆらゆらロード〉によって、海辺を徒歩と小型モビリティでのんびり通りおおらかな風景を楽しむ体験を提供する。

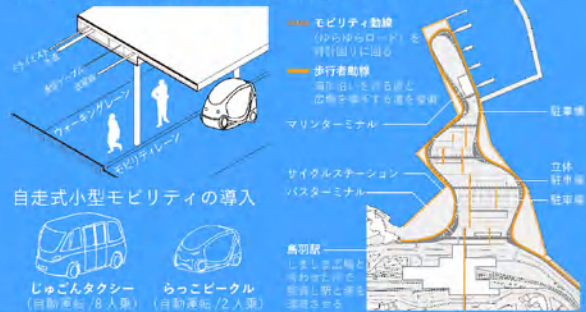
〈しましま広場〉と〈ゆらゆらロード〉による駅と港の一体整備

〈しましま広場〉 鳥羽を訪れるさまざまな人を巻き込むプログラム



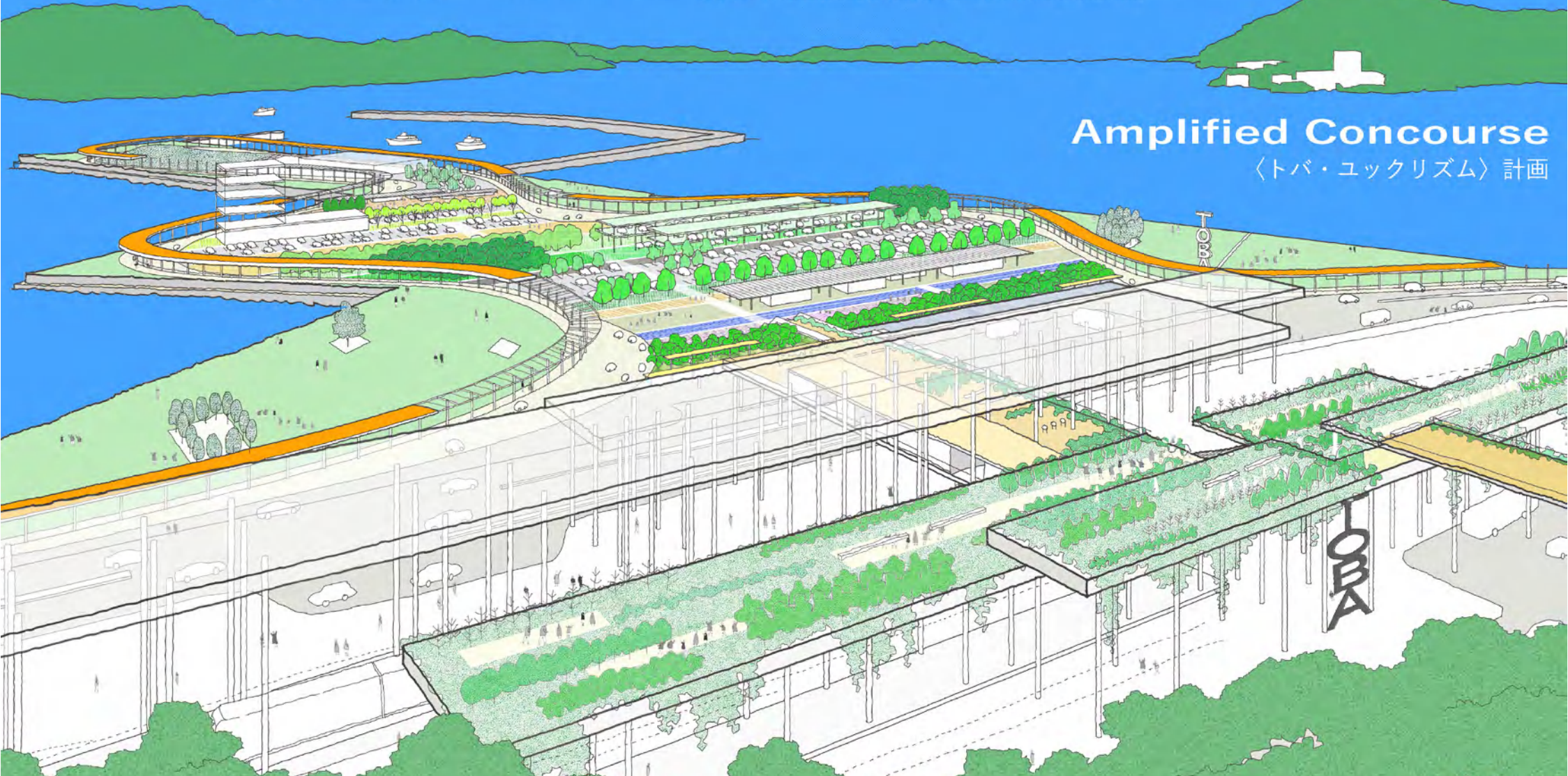
〈しましま広場〉：埋立地を層状に分割した広場、WSでの意見を参考に、施設・広場を配置、それらの間に緑地を設け、埋立地全体の修景を行う。
〈ゆらゆらロード〉：海辺を巡る歩行者とモビリティのための道路。インフラを収めた屋根が部分的にかかる。

〈ゆらゆらロード〉 歩行者と自走式小型モビリティの共存



Amplified Concourse

〈トバ・ユックリズム〉計画



鳥羽の風景を繋ぐ しま・ブリッジ



鳥羽は、古来より近接した海と山が作り出す豊富な資源に恵まれ、近年では地元の方々の努力により、資源を活かした国内のエコツーリズムの先駆的な取り組みが注目を集めています。また、近鉄の観光電車により新たな人の流れが生まれています。こうした時代の変化を受けて、次世代のために鳥羽駅周辺がどのような場所であるべきか、そしてどのように移行していくのかを考えました。

鳥羽駅は伊勢・志摩地域の玄関口として、訪問者が最初に出会う場所であり、自然や人とのつながりを生む重要な可能性をもちます。しかし現在の駅前空間、特に駐車場は自動車中心に整備され、観光客には自然や地域とのつながりを感じにくい場となっています。一方、この駐車場は地元の人々にとって祭りなどのイベントで人が集う大切な場所でもあり、その公共性のポテンシャルは無視できません。

そこで、駅前空間をより公共的かつ魅力的な場所へと変えるためのビジョンとして、「しま・ブリッジ」という構想を提案します。「しま・ブリッジ」は人、こと、もの、場所を繋ぐインフラストラクチャーです。駅前に来る人に、伊勢志摩周辺の豊かさを人々に気づかせ、思わず滞在して巡ってみたいくなるような、きっかけを与えることを目指します。また、「しま・ブリッジ」は地元の方の意見をもとに、使われ方の検討をし、次世代の地域の担い手が活躍する場所となります。

計画の実現にあたっては、ランドスケープデザインと建築計画を組み合わせ、段階的に取り組みを進めていきます。人の流れの設計、駐車場の機能の再検討、地域資源の活用、周辺空間の個性づけ、地域に関わる人々の生業支援、自然環境への配慮など、複数の視点から包括的に空間を構想します。この「しま・ブリッジ」は、鳥羽駅周辺を未来に向けて柔軟かつ持続的に変えていくための提案です。

01 <現状と展望> 環境を活かした鳥羽ならではの体験ができる駅前空間

鳥羽駅周辺は、1960年代より伊勢・志摩周辺への玄関口として発展してきました。埋め立てにより海へ突出した形状を持った鳥羽駅周辺は、交通の中心地でありながら海や山に囲まれ、対岸に離島が望める、豊かな環境に囲まれた場所だといえます。

一方で駅前は商業施設や駐車場が広がり、鉄道や国道によって、周囲の海や山、島との繋がりが感じにくくなっていく問題を抱えています。



豊かな環境に囲まれた鳥羽駅周辺エリア

私たちは、この周囲豊かな環境に囲まれた鳥羽駅周辺のストラクチャーを最大限活用し、エリア内で全方位に広がりをもった鳥羽ならではの体験ができる駅前空間を提案します。

一部で海を楽しむ場でも、新たな駅前商業施設でもなく、ここにしかない豊かな自然や、今に続く鳥羽ならではの営みを感じることで、ここにしかない風景を育てていくことを目指します。



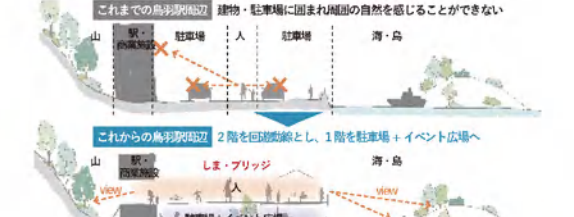
鳥羽周辺の観光資源をつなぐ

02 <提案> 周囲の自然とまちの人々を繋ぐ「しま・ブリッジ」

これまでの鳥羽駅周辺は、駅前の商業施設や海沿いの駐車場に囲まれ、周囲の自然と切り離されてきました。観光客や地元住民が利用する日常動線を2階レベルに持ち上げることで、周囲の自然と人々を繋ぐ「しま・ブリッジ」を提案します。

「しま・ブリッジ」により得られる3つの環境

- ① 2階レベルは自然を感じながら回遊したり滞在することができ、鳥羽駅からもシームレスに繋げる事で誰でもアクセスしやすい場所にします。
- ② 1階レベルは公園のように自由で一体的な利用ができ、周辺の施設と連携したイベント時の広場機能と駐車場機能を併せ持った、フレキシブルに利用できる地域の場としても提供します。
- ③ 生物・海・山といった自然環境に配慮し、建材や舗装、植栽を計画することで、周辺の自然と繋がる場所になります。



03 <開発のプロセス> エリアの効率性・回遊性の向上と賑わいの波及

- ①「各エリアの広場化」
中央のパルビルは解体し、都市公園とします。
・駐車場は台数を確保しつつ広場と兼用します。
・緑を増やすことで、人の居場所を多くします。
- ②「ブリッジによる回遊性」
・今回の伊勢神宮式年遷宮が行われる2033年を目標に、海沿いを2階レベルのブリッジにより繋ぐことでエリア全体の回遊性が向上します。
- ③「エリアの更なる発展」
・公園、利用者や運営者によって様々な使われ方の提案を受け、鳥羽駅前が活性化し、やがて離島やまちにまで賑わいが波及します。



04 <市民参加> 器となる「しま・ブリッジ」

「しま・ブリッジ」は鳥羽に関わる多くの人を受け入れ変化する「器」です。「しま・ブリッジ」を計画するうえで、建物や広場の運営・企画は様々な立場の方々の意見をもとに決めていきます。地元や移住する方がスモールビジネスを始めたり、大量に訪れる観光客をシーズンごとに対応できるような仕組みや、市民参加のワークショップをもとに考えます。「しま・ブリッジ」を巡れば今まで知らなかった鳥羽の魅力がぐっと伝わる施設を目指します。



様々な立場の意見を取り入れるワークショップ 139



06 <都市計画>

PFIを取り入れ民間資本を交えた開発

鳥羽市 民間事業者
PFI事業者
地元商工会 運営者

「駐車場⇔広場」の二面利用

周辺施設のビジネスを活性化

駅前から接続したブリッジによる新しい人の流れは、鳥羽一番街など周辺の建物と接続することで、人が立ち寄るきっかけを作り、更なる経済効果を生みます。

07 <ブリッジの計画>

海と島の景観を生かしたブリッジ

みんなの避難場

駅からフェリー乗り場までのインクルーシブな動線

鳥羽市地域防災計画にある津波想定高さを考慮し、6m以上の高さで避難が行えます。経済性(施工効率・メンテナンス性)を考慮した工法・材料を採用します。

08 <ランドスケープ計画>

海・人に配慮した駐車場の外構

牡蠣を活用した植栽計画

解体資材を再利用した公園のランドスケープ

駐車場は緑化舗装・透水性アスファルトを採用することで、雨水を土壌に蓄えることができ、ヒートアイランド対策、汚染物質の海への流出防止となります。

三重県一位の生産量の牡蠣から作られた有機肥料「鳥羽力キ殺石灰」を積極的に使用し、公園・ブリッジの植栽計画に用いて、地元資源循環に貢献します。

鳥羽パルビルを解体することによって出るコンクリートガラなどの廃材は、公園の丘などランドスケープに再利用され、資源のロスを減らします。

09 <想定シーン> 多様な人による「しま・ブリッジ」の活われ方

鳥羽で行われるイベントの活用幅を広げる

しま・ブリッジができてから祭りの特需が増えて、駅前からもたくさん人が来るようになったなあ。次はまらの人に協力してもらってビアガーデンでも開催してみよう。

風景と一体となった新しい鳥羽の日常をつくる

今日は晴れて海の方こう側の島までよく見えるなあ。今度久しぶりには船に乗って志志島まで行ってみようか。

新しい人を受け入れ、まちに触れるきっかけとなる

自由にお店を出せる場所が駅前にできて、まちの中にもたくさん知り合いができた。動いている間も子供を預けられるし、移住して本当によかった。

風まち

稜線がつなぐ鳥羽の原風景



◇港のまち鳥羽 / 特異な地形を読み解く「稜線」



例に行かぬ島々や入り組んだ海岸線など、山と海が寄り添うようには交錯する特異な地形を持つ鳥羽の海は、時代を超えて人々の暮らしを支えて原風景です。
私たちはそれらを山と海が織りなす「稜線」というかたちで読み解き、それを基盤に輕輕することで、土地の本質を体感できる空間を構想します。

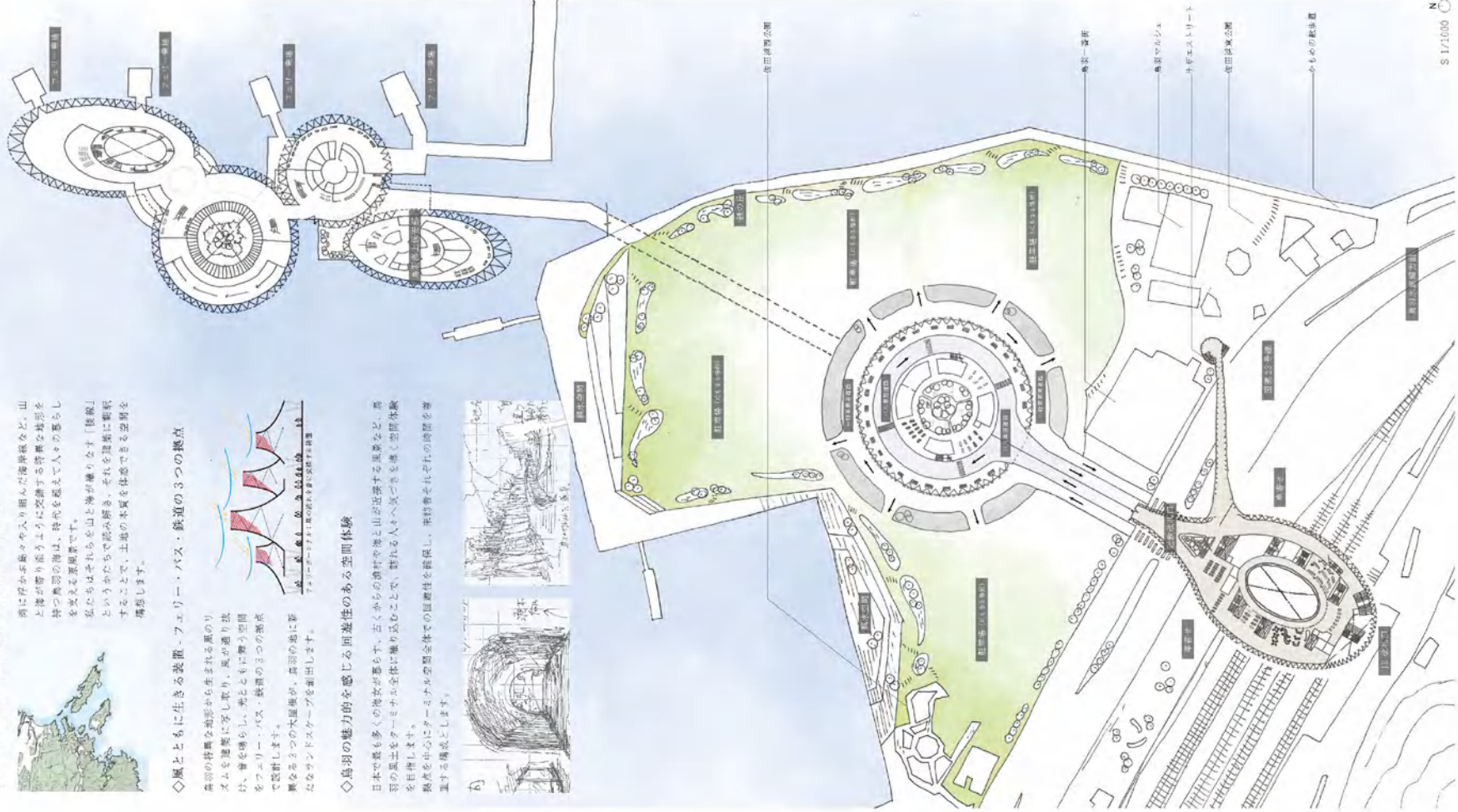
◇風とともに生きる装置・フェリー・バス・鉄道の3つの拠点

鳥羽の特異な地形から生まれる風のリズムを建築に受け取り、風が通り抜け、音を傳らし、光とともに動く空間をフェリー・バス・鉄道の3つの拠点を設計します。
異なる3つの大屋根が、鳥羽の地に新たなランドスケープを創出します。



◇鳥羽の魅力を感じる回遊性のある空間体験

日本で最も多くの海女が暮らす、古くからの漁村や海と山が近接する風景など、鳥羽の風土をターミナル全体に盛り込むことで、訪れる人々へ風土を感じさせる空間体験を目指します。
拠点を中心にターミナル空間全体の回遊性を確保し、来訪者それぞれの時間を尊重する構想とします。

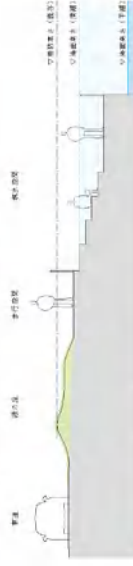


配置図・地形状況



◇多島海のリゾートを楽しむ海辺の親水空間の創出

海への誘いをきっかけに親水空間を創出することで、海と山との連続性を確保し、海沿いの風景を楽しむことができるようになります。



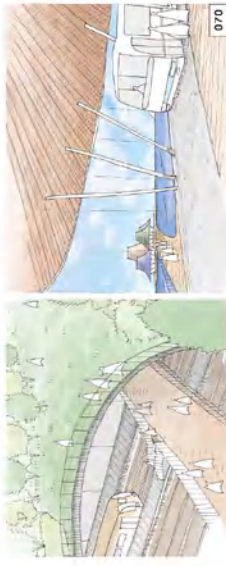
◇駅前歩道の歩行空間の創出

駅前歩道を歩行者の歩行空間として整備し、駅前からの海辺への誘いを創出します。



◇誰かの「また来たい」を育てる

現在の鳥羽駅前には、まちや空間が分断され、ただ通過するだけの場所となっており、美しい風景に足を止め、ゆっくり味わう余地が少なく、また滞在する機会も少ないです。
私たちは、駅前の町並みを維持しながら、鳥羽らしい風景や暮らしの雰囲気を創出することで、この空間を再構築します。
日々、多岐にわたる鳥羽の魅力と出会う「旅」を通じて、誰かの「また来たい」を育て、土地の魅力を未来へと引き継ぐ「鳥羽の玄関口」をつくっていきます。



4 高校生実践アイデアキャンプ

8月4日から6日までの2泊3日、鳥羽駅とその周辺エリアを対象に、実践につながる空間提案を目指した合宿を開催しました。

まちづくりや建築に関心を持つ高校生15名が、鳥羽市内はもちろん全国各地から集結。「自分ならこんな空間にしたい！」という思いを出発点に、4つのグループに分かれて議論を重ね、提案として形にしました。

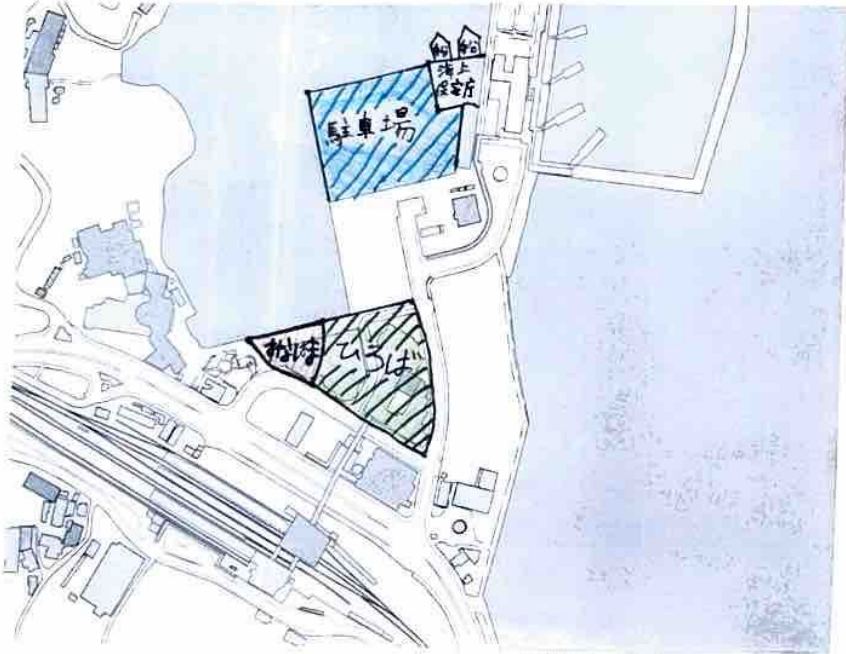
最終日の8月6日（水）には地域の皆さんをお招きし、デザイン発表会を実施しました。短い時間ながらも、多様な視点が交わり、鳥羽のまちを見つめ直すきっかけが生まれた3日間となりました。



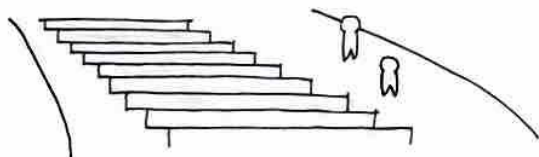
海と人を繋ぐ New 広場!!

～幅広い世代が遊び心を忘れず楽しめる!鳥羽駅徒歩1分の砂浜海岸と
円柱空間の新シンボル～

「数年前パルビルが解体されて商業施設ができるかもしれない」と聞きました。そこで、商業施設をもう一度建てても活気は戻らないのでは...?と考えると私達はパルビルの跡地と現在の佐田浜第2駐車場を取り壊した跡地を使って「海と人を繋ぐNew広場」を提案します。ターゲット層は地元の人で子供から大人まで幅広い世代の人の交流を盛んにする「地元の人に寄り添う場所」を目指します。



▲ 敷地図 S=1/2500

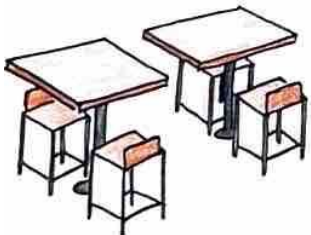


階段を使うのが難しい車椅子の人や
お年寄りのためにスロープをつける

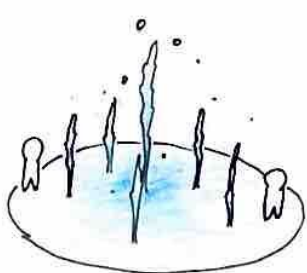


全面に芝生を使って海と空との
コントラストを楽しむ

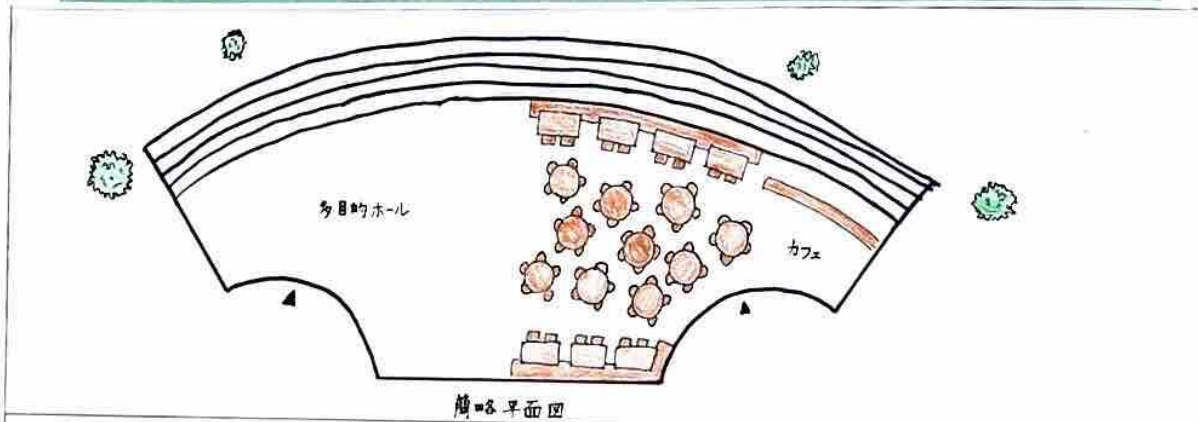
海を眺めて済むのが望ましいスペースで
フィラメントにドリンクやグリルを楽しむ



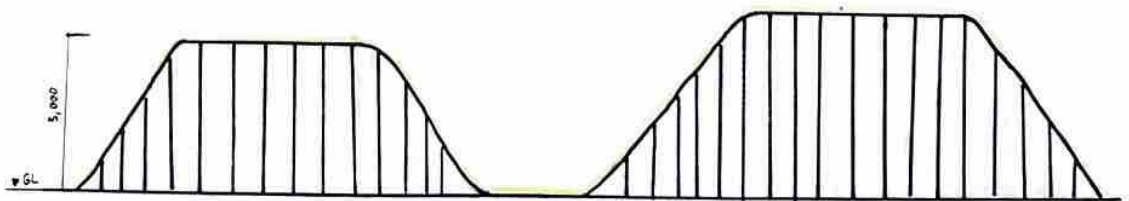
暑い日でも子供たちが
楽しく遊べるように
水遊びができる噴水を
つける



Bチーム おにく



簡易断面図



簡易断面図

新一番街を開発計画 A型トヨタ

私たちが感じた鳥羽駅の課題

駅からマリンターミナルや鳥羽水族館へのルートがわかりづらい
 駅から見たときに建物によって海の景観がとぎれていて海を感じられず、鳥羽の魅力を押し出せていない

このためにマリンターミナルや鳥羽水族館への動線上に分かりやすい観光拠点をつくりたい。
 その観光拠点では海はむしろ人鳥羽を最大限感じられる工夫をし、鳥羽の魅力を見つけてもらえる施設を目指します。

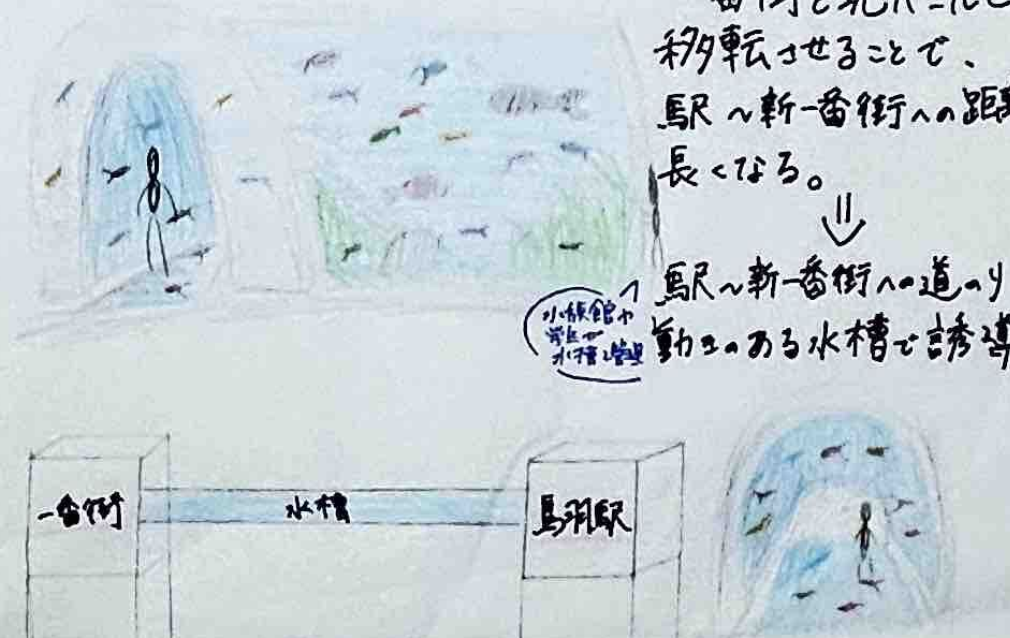
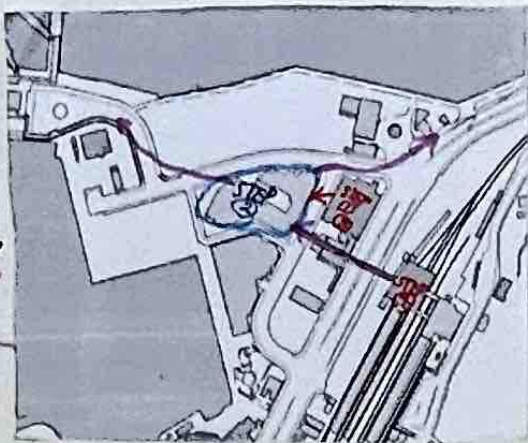
鳥羽駅と一番街を繋ぐ連絡通路

一番街と現パルビルと移転させることで、駅〜一番街への距離が長くなる。

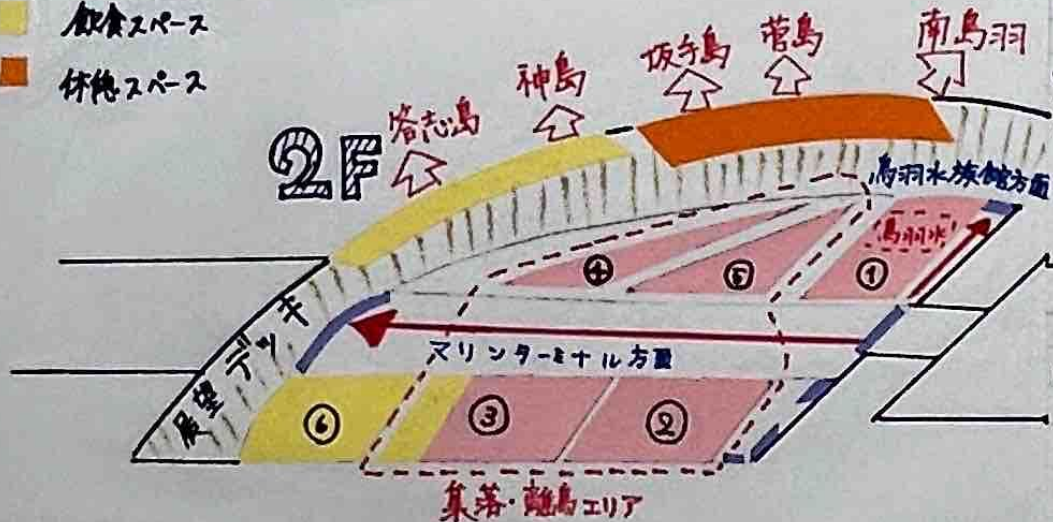
鳥羽駅〜一番街への道のりを動線のある水槽で誘導。

提案

- STEP① 現一番街を取り壊す。
- STEP② パルビルの土地を新一番街として活用する。
- STEP③ 一番街の跡地は広場として活用する。
- STEP④ 鳥羽から新一番街に向けて飽きさせない重み線を作る。



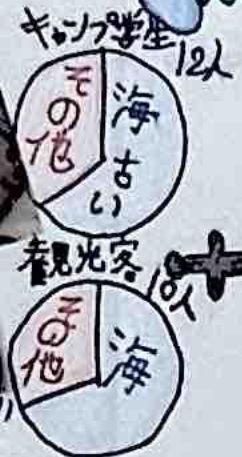
- 鳥羽の魅力を伝える展示
- 飲食スペース
- 休憩スペース



- 鳥羽水族館**
鳥羽水族館の飼育員の方しか知らないようなことをガラスや展示するおみくろがあることで多岐に亘るコンテンツを組み合わせやすくする。
 - 相違町と海女さん**
海女さん体験コーナーを中心として相違の魅力と海女さんのアピールする。相違の名産品を販売(食べ歩き)するおみくろを売る
 - 笠志島**
3つの集落ごとに区画を作ってその区画の中心に全てを囲むように笠志島の雰囲気を作る
 - 神島**
ブース内の展示の台に顕微鏡を使用して神島の雰囲気を作る。
 - 菅島+坂手島**
しろうこ祭りや菅島灯台の模型にする。さらにしろうこ祭りの旗を店の入り口に模型に立てて菅島の雰囲気を出す。坂手島ゾーンには上から2つ層根風などのまつして坂手島特有の家同士の並ぶをアピールする。
 - 喫茶・カフェ**
夕の喫茶店をリノベーションして移動していただく。
- 展示・見直しスペースは集落の方々に作っていただく

「駅が伝える駅はつくる」鳥羽革命隊

現状



「鳥羽がしがない!!」

市のフィードバック

- 食との連携
- 仕掛け学の期待
- ミジュマルへの依存



「提案」

「たくさんの視覚に
うたえる。」



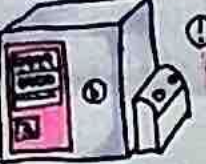
「アート」



② イス



③ 自販機スペース



⑤ とばまんぞくセット

食・歴史・文化の体験は、
7-ボン村とスタンプラリー

スマホアプリで贈品プレゼント!
せりせりお楽しみください。鳥羽駅で、お楽しみください!
入場券付き!

効果

仕掛け学により駅利用者増加
駅内まち全体をつながりやすくなる

実現するには

- 各観光施設の協賛を得る
- SNSを活用した広報
- PR動画制作
- 企業と連携したイベント作り

① 仕掛け学 おいかけをこころし

JR おしおし 近鉄

何の動物かは誘導先で
答えあわせ!

